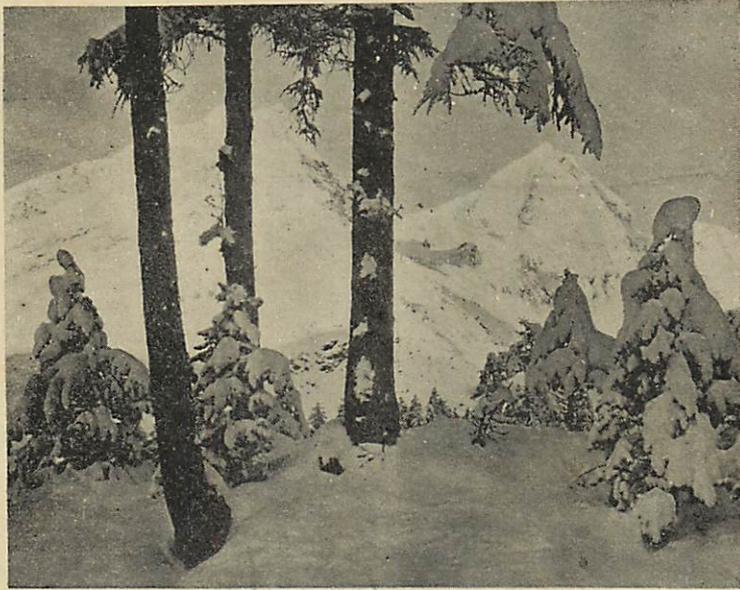


山とスキー

第九十九・百號



札幌 山とスキーの會 發行

大正十二年七月廿七日第三種郵便物認可
昭和五年八月四日印刷納本

昭和五年八月六日發行（毎月一回）

◇すまりをて得を讀愛御の下殿宮父秩りよ號刊創は誌本◇

次目號百・九十九第

記 事

トロンデイエムに開催されたる諾威スキー大會

木 原 均

〔一〕

「山」に關する覺書（大島亮吉君の遺著について）

伊 藤 秀 五 郎

〔九〕

廢刊と解散の言葉

廣 田 戸 七 郎

〔二〇〕

雜 錄

〔二七〕

寫 眞 版

ホルメンコロン大會の王杯受賞者

フイニアレンゲン

木 原 均

トロンデイエム諾威スキー大會優勝者

ビルゲルルード

麻 生 武 治

空 沼 嶽 附 近

神 谷 俊 雄

昭和五年八月發行

トロンデイエムに開催されたる 諾威スキー大會

木 原 均

オスロに二月二十一日朝到着して後十九日間滞在、三月十一日夕刻伯林へ向け出發しました。その間第十一回スキー會議に出席し、ホルメンコルンの大會と諾威國內の大會（トロンデイエム市にて開催）を見ました。會議の概要とホルメンコルンについてはアサヒスポーツに送りましたからトロンデイエムの國內大會の結果を書きます。

ホルメンコルンのスキー大會は諾威に於ける事實上最大の大會ではあるが、毎年諾威スキー聯盟（Norges Skiforbund）によつて同國の大會が何れかの地で開かれるのである。

今年は諾威の古都トロンデイエムに開かれた。ホルメンコルン大會の一週間あとである。出場者は大部分は、知られた者であるが中には無名の士も居て夫等の人々の活躍によつて興味は非常に多くなつた。

三十キロではルスタットストエンがブロードールに勝ちをゆづり、更に彼は複合競技にも王杯を獲る事が出來ず、重ねくの不運であつた。

此の二週間に餘り走り過ぎたのであらう。諾威のデイスタンスを一人で引うけて芬蘭と瑞西の猛者と覇權を争つた後と

て相當疲勞して居たのであらう。

三十キロの結果を新聞から抜書すると次ぎの通りである。

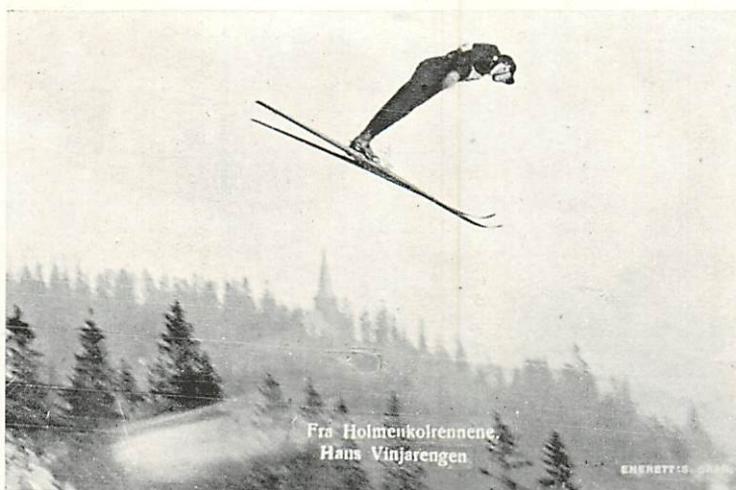
順位	走 者	タ イ ム
1	T. Brodahl	1, 20, 55
2	P. Belgum	1, 31, 02
3	A. Rustadten	1, 31, 33
4	Sig. Vestad	1, 34, 02
5	M. Vangli	1, 34, 25
6	T. Beisvang	1, 34, 35
7	O. Stenen	1, 34, 55
8	L. Skagnæs	1, 35, 25
9	A. Storti	1, 36, 10
10	A. Ellingsrud	1, 37, 28

ホルメンコルンの大會で充分に競技會は見たと思つて、もう引上げるつもりで居た所を多數の選手役員(中にヘルセツト中尉、麻生選手)をのせた汽車を見送りに出て急に行き度くなつて豫定を變更してトロンデイエムに向つてオスロを三月七日朝に立つた。此の前日に三〇キロの競走は終んで八日に一七キロに、九日にジャムプがあるわけである。

全國の大會には三〇キロをやり、ホルメンコルンでは五〇キロをやる事に何等かの理由ありやときいて見たが、之は傳統で外には理由がないとの返事を得た。三〇キロでも耐久競走としては充分だとも思へる。

三月八日に行はれた一七キロ競走は雪の状態が甚だ悪かつた。トロンデイエムの市中は雨が降り競技場附近に行くと水雪がチラ／＼して居ると云ふ工合であつた。

十時に開始されてA組が先づスタートしB組が續いた。此のB組が走る頃は相當寒さも増し迂りがよかつたとか云ふ話



ホルメンコロン大会の玉杯受賞者・フィンアレンゲン



トロンアイエム諸威スキー大会優勝者・ビルゲルロード

である。AとBとのタイムを比較するとBがAに甚だ勝れて居ると云ふ事を發見するであらう。Bは各地の大會で入賞したことの多い組でAは自他共に許す著名の選手である。

A 組

1	Arne Rustadstuen, Lilleh.	1, 13, 17
2	Ole Stenen, Oyer	1, 13, 25
3	M. P. Vanglie, Aamot.	1, 13, 40
4	Peder Belgum, Bul	1, 13, 53
5	Kristian Holmen, Heming	1, 14, 37
6	Leif Skagnes, Politiet	1, 14, 38
7	H. Vinjarengen, N. Land	1, 15, 45
8	G. Muruaasen, N. Trysil	1, 16, 17
9	Halstein Sundet, Frigg	1, 16, 23
10	Esten Gjelten, Vingelen	1, 16, 52
11	Storm Pedersen, Lilleaker	1, 17, 26
12	Ivar Bustad, Bul	1, 17, 42
13	Helge Torvo, Baerum	1, 17, 46
14	Tr. Brodal, Fossekallen	1, 18, 45
15	Mauritz Lundbye, Raufos	1, 18, 48
16	Reidar Raaen, Freidig	1, 19, 27
17	Reidar Odegaard, Lilleh.	1, 19, 35
18	Arne Busterud, Vang	1, 19, 57
19	B. Bjerkeng, Maalselv	1, 20, 17
20	Hj. Bye, Jernbanen	1, 20, 42

B 組

1	Odd Stageberg, Selbu	1, 07, 40
2	Olaf Nyhus, Domaas	1, 10, 13
3	Osc. Gjoslien, Drafn	1, 10, 38
4	Hans Ellingsen, Mo	1, 10, 50
5	G. Sakshaug, Snogg	1, 10, 55
6	Olaf Lian, Freidig	1, 11, 18
7	Axel O. Hansteen, Lyn	1, 11, 26
8	Tr. Beisvaag, Vif	1, 12, 28
9	Th. Heggem, Rindal	1, 12, 28
10	G. Stalsberg, Naeroset	1, 12, 31
11	Th. Siemenrud, Domaas	1, 12, 51
12	M. Brynhildsvold, Roros	1, 13, 05
13	Olav Bakken, Hodalen	1, 13, 22
14	Tr. Sundem, Mosjoen	1, 13, 53
15	Sigurd Roen, Rindal	1, 14, 29
16	A. Estenstad, Hoilandet	1, 14, 45
17	K. Kielland-Lund, Stange	1, 14, 56
18	Sv. Henriksrud, N. Land	1, 15, 07
19	Olav. Steinsheim, Opdal	1, 15, 24
20	Oddbj. Hagen, y. Rendal	1, 15, 35

ルスタットスツレーエンはA組の第一位ではあるが、B組にすれば僅に第十三位に止まるに過ぎない。

皇帝杯（コンゲンボカール）はA Bを通じて最優秀の選手に與へらるゝものであるからB組の第一位は此の點で非常に

有利なわけである。(點数の計算はAはA同志、BはB同志で行ふが、皇帝杯をうけとる人に對してはABを合しての計算をなす由である。ゲームンボカールの場合も同様)。

此の一七キロには我が麻生選手も番外として百十六番に走り一時間二十三分二十二秒で第六十位に當る成績であつた。

(A組は全部で九十名)

此の一七キロの成績で三月九日(日曜日)のジャムブ大會は引續き行はれた。此の日は複合のジャムブの外にオールドボイスのジャムブと少年組のジャムブとが同時に行はれてホルメンコロンと全く同じである。

昨日に引きかへ寒くはあるが天候甚だ悪く、風が吹き雪さへ降ると云ふシケの日であつた。それでも一時より少しの休みもなく競技を續行した。

恐らく雪が眼に入つて轉んだ人もあらう、風の爲めに距離を少なくしたり又は思はぬ轉倒をした人もあると考へられるにも拘らず始終同一の速さで競技が進行された事は實に美事なものであつた。

此の日も諾威の皇帝陛下及び皇太子殿下が熱心に御觀覽遊された。

結果は次ぎの如きものであつた。

(複合競技には一七キロとジャムブとの總結果を以つてし、オールドボイスと少年組のジャムブだけにはジャムブの順位を示す)

A 組

1	Ole Stenen, Oyer	442.15
2	Kristian Holmen, Hemning	439.35
3	Peder Belgum, Bul, Oslo	438.10
4	M. P. Yungli, Aarnot	432.70
5	Storm Pedersen, Lilleaker	424.00

6	Helge Torvo, Baerum	422.28
7	Arne Busterud, Vang	421.65
8	Esten Gjelten, Vingelen	421.65
9	Laurits Lundby, Raufoss	415.05
10	Gjermund Muruaasen Nordre Trysil	413.35

B 組

1	Odd Stageberg, Idre. Vardifield	437.55
2	Gunnar Sakshaug, Snogg	428.20
3	Oscar Gjøslien, Drafn	414.55
4	Sv. Henriksrud, N. Land	409.35
5	Olav, Nyhus, Dombaas	408.39
6	Roar Hellum, Frisk	408.00
7	Axel O. Hansteeu, Lyn	399.35
8	E. Romu'dsli, Leinstrand	397.96
9	Anders Estenstad, Hoilandet	395.45
10	Einar Ustad, Orkdal	395.04

ジ ャ ム プ

オールドボイス

1	Karl Haave, Hamar	221.95
2	Ole B. Andersen, Vaalerengen	214.75
3	Olaf Aamo, Lokken	211.80
4	Ole Nasset, Notodden	207.85
5	Ole Skarholt, Svorkmo	207.55

6	O. Halvor Kampen	204.80
7	O. Nilsgaard, Foldal	204.10
8	Rolf Larsen, Baerum	203.00
9	Ole Borchgrevink, Brynssen	201.90

少年組

1	Birger Rund, Kongsberg	233.65
2	Bjarne Scherwe, Trondhjem	215.85
3	Jon Barbo, Svolvær	213.15
4	Randmod Sorensen, N. Land	213.05
5	Arne Howde, Vikesund	213.05
6	Olaf Schanche, Nidaros	212.10
7	Th. Lieng, Nes, Hedmark	210.35
8	Robert Johansen, Ullern	210.10
9	Erling Viksjo, Nidaros	208.45
10	Per Fossum, Asker	208.00

ジャムプでルスタッドストウエンは一回仆れて優勝の機を失し、ステーネンは三十九米、三十六米を立つて第一位となつた。B組の新人スタグスベルクは三十六米を二回著實に飛んで美事皇帝杯を獲得した。

ジャムプだけで考へると、先年來朝したラーレ、コルテルードの弟スフエーン、コルテルードが四十三米五、四十二米五飛んでダーメンボカールを得た。

少年組ではジグムンド、ルードの弟であるビルゲル、ルードが二回共最長不倒距離四十五米五を飛んで美事一等となつて兄弟そろつて世界有数のジャムパーである事を示した。十八才の若者に幸あれ。

オールドボイスでは六十才の一ジャムパーがプログラムにはのつて居たが出なかつた。第一位はホーブエ(三十七才)

第二位はウール、ベ、アンデルセン（三十七才）此の人は番外に四十九米飛んで立つた。

麻生選手は一回は踏切が遅れて失敗し、第二回には三十三米飛んで立つ。此の時の聲はビルゲル、ルードの時より以上のものであつた。ジャムプは一回毎にラデオで全国に放送され、オスロにかへつた時にはもう誰れも此の競技場況を知つて居ると云ふわけであつた。番外に走つたのではあるが麻生選手には特別賞品が與へられた。

以上で今シーズンの主なる大會は終つたのでトロンディエムを十日の午前に見物し、午後出發、十一日の早朝オスロに歸省した。

因にヘルセツト中尉は今年の諾威スキー協會總會で次年度の會長に推され就任した。（今までの會長エストゴルト氏は辭退した。）

同中尉によつて諾威のスキー界も益々健全の發達をなさるやう希望して筆を擱く。

——（三月九日シベリア汽車中にて）——

「山」に關する覺書

——大島亮吉君の遺著について——

伊 藤 秀 五 郎

近來我國に於ける山登りが加速度的に隆盛になつた結果として、この數年來登山に關する出版物は極めて多い。殊に各學校の山岳部で年報又は部報を出してゐないところは殆んどなく、中でも舊い歴史をもつ「登高行」「リュックサック」の如きは、世界の何處に出しても恥しくないやうな充實した内容をもつてゐる程である。(これは、現在の若いジエネレイションに於ける山登りが、各學校の山岳部を中心にして展開されてゐることの一つの現れに外ならない。このことはやはり外國でも同様で、登山界の新しい動向は、アカデミイのアルパインクラブに依て創り出されてゐる)

しかしながら、ひるがへつて、單行本の形で出版されたものについてはどうであらうか。勿論、純然たる案内記又は案内記の内容に於て價值あるものは、寡聞な私の知る限りに於ても、決して二三に止らないが、ひとたび私達の關心を、山岳文學の領域に限るとき、よくかのジャヴエルヤング、フインチ、フイツシャー、或はハンス・モルゲンターレルに比すべき優れたる著作を我國のそれに見出し得たであつたらうか。遺憾ながらそれに對して私達は否と答へざるを得ないであらう。だがしかしこの白紙の世界も永久に白紙として残されることは許されなかつた。「山行」以來久しく寂寞たりしこの領域は、幸にもいまや二つの新

しい著書に依て花々しくも飾られた。そしてそれは我國の登山界にとつても亦絶大な收獲でなければならぬ。二つの著書とは、いふまでもなく、板倉さんの「山と雪の日記」及び大島さんの「山」である。而もそれが二つながら遺著となつて了つたことは、また何たる運命の皮肉であらう。「山と雪の日記」についての感想は、他の機會に譲るとして、こゝでは「山」についての私見を述べることにする。

×

いつたい大島君の山に關する文献は、殆んどあらゆる方面に涉つてゐて、卷末の著作表に依つても明かな如くに、それは實に夥しい數に上つてゐる。登山史に關するものゝみでも、優に一冊の大部な書物を成すに足るほどで、本書は極めて一小部——しかし或る意では代表的なもの——を選んで上梓されたものである。

内容は書題に示すが如く「研究と隨想」であるが、研究は雪崩に關する文献を蒐めたものである。元來雪崩の研究に於て、大島君は我國の權威であつた。勿論、大島君以外にも隠れたる雲崩の研究家はあることであらうし、こんにちのスキー登山家——少くとも雪崩の危険のある地方にス

キー登山を試みるほどの登山家で、一般的の雪崩に關する知識をもたないものは無いであらうが、とにかく我國で登山家の立場から組織的に雪崩の研究をやりだした恐らく最初の一人は大島君であつた。いつたい山登り、殊に近代の科學的登山は、これを技術的な方面から見るとは一つは科學學である。その意味に於ては大島君は極めて優れた科學者であつた。特に雪崩に關する知識は極めて該博で、卒直に言つて、私などの雪崩に關する知識は（雪崩のみに限つたことではないが）殆んど大島君の研究に負ふといつてもいゝくらゐのものである。而も大島君の研究は、單に紙の上のみのそれではなくて、事實に對する豊富な經驗が基礎となつてゐたことは、その研究が我國の未だ極めて歴史の若いスキー登山界に絶大の貢獻をなすと同時に、また大島君自身に於ても、總高岳スキー初登山の如き記録的な功績を貽した理由なのである。これらの文献は、かつて「登山行」「山岳」「山とスキー」等の山岳雜誌に分載されたものであるが、いま本卷に系統立つて蒐められたことは、實にスキー登山家を益すること大なるものがある。

×

言葉を換へれば新しい登山態度といつたものを、明かに私達に示してくれた登山家としての大島君の半面である。

でそんなことはとにかくとして、試みに例を挙げると、

第三型に属するものには「荒船と神津牧場附近」と「峠」の後半がある。「北海道の夏の山」は第二型のものとして、は恐らく最上のものであらうが、或はむしろ第三型とみる方が至當かもしれない。それ程にも第二型としては主観的な色彩の濃いものである。「石狩岳より石狩川に沿ふて」も、第二型に属する典型的のものであるが、これはむしろ後述の如き意味に於て更に興味深きものである。第一の型の例としては「穂高岳スキー登山」を挙げる事が出来る。

×

次に個々の作品について、私自身の極く簡単な感想を書いてみる。

「石狩岳より石狩川に沿ふて」は、今からおよそ十年前の大正九年の七月に行はれた登山の紀行で、大正十年発行の「登高行」第三年に掲載された。勿論その頃は未だ北海道の山登りは曙光時代で、殆んど部分的にしか登られてゐな

かつた。山岳地方の精密な地図も殆ど無い時分で、(陸測五万の旭岳附近が出たのが大正十三年であつた) 纔に小泉さんの製作になる「山岳」附圖が唯一の指針で、大島君達のこの旅行もそれによつたものである。殊に、石狩岳からユニー石狩岳(陸測地形圖名音更山)を経てユニー石狩川を下るルートは全然未知のところであり、當時としては大旅行であつたに相違ない。北大の私達の仲間も直接この紀行から大きな刺激をうけたものである。その當時東京からは、るばると北海道の石狩岳を目指して出かけて行つたのは、恰も十九世紀から二十世紀の初葉にかけて、アルプスに於て花々しい活躍をしたイギリスの登山家達が、更に遠く人跡未踏のコーカサスやカナダの山岳地方に登山を試みたのとよく似てゐると私には思はれる。それとこれとは山の大きさからいへば比較にはならないけれども、私はこの一文を讀んでそう感じた。そしてこの聯想はそんなに滑稽な程突飛なものではないと思ふ。恐らくその時に得た大島君達の喜びは、かつてマンメリイやコーリイの得たそれにもまして大きなものであつたに違ひない。私はさういふ意味でこの一文を非常に面白く思ふ。私の勝手な想像を許して頂

けるなら、本書の編輯者も恐らくそういふ意味から、これを選んだのではないであらうか。これに私が興味をもつ他の一つの理由は、これは大島君の作品としては比較的初期のもので、これを更に後期の作品、例へば「北海道の夏の山」や「神津牧場」などに比べると、大島君の登山家としての成長の跡がはつきりと窺へることである。勿論それはこの作の内容がつまらないものだといふ意味ではない。弱冠にしてよくこれだけのものが書けたと、むしろ私は驚異してゐるくらゐなんだが。尤もこの文章は後から大島君自身で多少推敲したところもあるらしい。いま「登高行」第三年が手許にないので、正確なことは斷言出来ないけれども以前に讀んだ時よりは、文章がいくらか洗練されてゐるやうな氣がする。若しこれが初めに發表された儘だとすると、いよいよ大島君の筆才は怖るべく、後年「峠」や「神津牧場」などが書けたのも敢へてあやしむに足りない譯だ。

「北海道の夏の山」は、場所としては然別山塊に限られた紀行であるが、しかしその題目の示す通りに、北海道の夏の山の特色といふものは殆どこの一文で言ひ盡されてゐる

若し北海道の山のことを尋く人があつたら、私は躊躇なく大島君のこの一文をすすめる。少くとも夏の山に關する限り、これ以外のことはすべて蛇足だ。否、山ばかりではない。それは實によく北海道の地方色をも描き出してゐる。もちろんこれ以前にも北海道の地方色を表した文章が無い譯ではない。例へば、啄木、幹彦などのものに二三ある。

(惜しいことに花袋は北海道に行つてゐない。その他の詩歌人の紀行など、何れも皮相的な寫生のみで、千篇一律に墮してゐる)けれども、これほど色濃く、正確に、而も全貌的に巧な表現をしてゐるものは無いのである。そして正直のところ私自身、北海道の山の良さ、その山歩きの面白さといつたものを、ほんたうに教へられたのもこの一文である。尤も、初めてこれを讀んだ當時は(大正十三年)まだ北海道の山歩きの面白さはよくは解らなかつたが、この頃になつてそれが漸く味へるようになったのは、全くこの作品を通しての大島君のお蔭だと思つてゐる。そういふ意味で、私などは、大島君達の歩いた跡の、落穂を拾つてゐるに過ぎない。それから、北海道と大島君を結び付けて考へると、いつも聯想されることは、冬から春にかけての雪

隨想の部分に於ては、ほど大島君の各方面の代表的な作
が集められてゐる。これらに依つて、私達は、多面的な登
山家としての大島君と、更に人としての大島君の全貌を窺
ふことが出来ると思ふ。これを「隨想」とはいふものゝ、
若しかのエミール・ジャヴエル、フイツィヤー、ヤング、
モルゲンターレル等の著作が山岳文學と呼ばれ得るならば
當然この「北海道の夏の山」「峠」の後半、及び「荒船と
神津牧場附近」等は、純然たる山岳文學といはなければな
らないであらう。而もそれは正に山岳文學として一つの最
高水準に位置するものである。

それならばいつたい山岳文學とは如何なるものか、とい
ふことになる、いまこゝに述べる餘猶をもたないから、
いづれ他の機會に譲るとして、こゝではたゞ大島君の作品
に關聯して、紀行文に就ての私見をちよつと記しておく。

ひとくちに紀行文とか登山記とかいふけれども、それに
對する明確な定義がある譯ではなく、その内容形式も様々
であり、實際には登山記と案内記、又は紀行と感想との嚴
密な境界をたてることは困難なことがしばしばあり、また
一つの作品にも色々な要素の含まれてゐる場合が多いけれ

ども、一般的に紀行文とか登山記とか呼ばれてゐるものは
これを作品についてはその内容から見て、また作者の側か
らはそれを書く時の用意（心構へ、創作態度）からみて、
大体三つの型に分けることが出来ると思ふ。

そのひとつは、その旅行なり登山なりの客觀的な記録で
ある。つまり、自己の見聞した事柄を、出来るだけ正確に
第三者に傳へようとするもので、主觀的な感想や思索など
を全く省き、従つてまた美文的な敘景なども必要としない
ところの、いはゞ地誌的トポグラフィカルな、山岳誌的モンタニストな案内記的な價値を
もつもので、これの最も客觀的な型をとつたものを登山案
内記とみる事が出来る。即ち登山案内記は、全然他の登
山者の利便に供するといふ意圖から、純粹に客觀的な立場
にたつて、出来るだけ多くの最も正確な記録と經驗に基い
て書かれたものでなければならぬ。

その第二の型は、從來普通に意味してゐるところのいは
ゆる紀行文で、時と處の経過を緯とし、これに客觀的な觀
察と主觀的な感想とを經として適宜に織り交ぜ、一つの登
山又は旅行をパノラマ的に再現したものである。

他の一つの型といふのは即ち最も主觀的なもので、その

旅行登山に於て得たる思想思索を主たる内容とし、案内記的な意味は殆んど考慮されないものである。この種のもは明かに山岳文學と呼ばれ得べきものである。

けれども勿論以上の三つの型の區分は絶對的のものではなく、中には明かにそれらの何れかの範疇に當て嵌るやうな典型的なものもあるが、むしろ或る部分は主として客觀的記述に従ひ、他の部分は極めて主觀的な色彩に富むといふやうに、何れともつかないものが多いのは、元來が極めてインデイヴィジュアルな性質をもつ山登りなるものゝ記録が、初めからそうした明確な意圖の下に何れかの形式に於て書かれなければならないといふ理由は全くないのだし、また實際にも多くの登山家は、殆んどそうしたことには無關心に心のまゝに筆を運んでゐるのだから、それはまた當然のことでもあるのだ。その上になほ山登りといふものが、ちよつと一口では説明し難い複雑な内容をもつてゐるものなんだから。だから一つの紀行文が、何れかの型を明確に表してゐるかどうかといふことは、決してその作品の價値を左右するものではない。

ところがこの「隨想」の部分に集められた大島君の作品

をみると、この三つの何れの型についても各々典型的なものを見出すことが出来るやうだ。そしてそれは過然の暗號としては、余りにも偶然すぎる程典型的なものなのである。想ふにそれは大島君の恐らく最初から意圖してゐたところではあるまいか。事實、大島君自らも時には明かにかゝる意向を示してゐることもあるのだ。例へば「荒船と神津牧場附近」は、私のいはゆる第三型の典型的な而も最も優れた作品であるが、その終りの方に、これは決して地誌的な案内記的な意味で書いたのではないといふことを、はつきりと斷つてゐるのなどがそれだ。けれども、いまこゝでは作者の意圖なんかはどうでもいゝのだ。それよりも私が言ひたいのは、これらの作品のすべてが、その内容に對して最も相應しい表現形式を得てゐることは、とりもなほさず大島君の非凡な文學的才能を裏書きするものだ、といふことである。そしてまた、かくの如く、山岳文學家としての大島君の優れた地位は、これら數編の作品の中に確保されてあるけれども、それと同時に、更に私達の記憶しなればならないことは、これらの作品を通して、山に對する新しい見方・考へ方、又は一つの新しい山の登り方・行き方

のある頃の北海道のことを大島君の筆で書いてもらひたかつたといふことである。雪のある北海道に行つてみたいといふことは、大島君自身からもよく書いてゐたし、この作品の最後にもちよつと書いてゐることで、事實計畫までされたこともあつたんだが、實現されなくて惜しいことだつた。いつかも、たしか「神津牧場」が出てからと憶ふが、山崎先生との會話にも二三度そうしたことが出たのを記憶してゐる。

「淵澤の岩小屋のある夜のこと」は、叙事文の形式をかりて、ある時期に於ける大島君達の仲間の山登りに對する信念を述べたものである。この文章に關聯して私はかつて本誌上に私見を述べたことがあるが、これを書いた大島君自身も、而もあの淵澤谷の墻壁をなす前穂高の北尾根で、マシメリイと同じ運命を享けなければならなかつたといふことは、性來の感傷心がつまらないことにも直ぐ感激していつも人の冷笑を買ふ私ではあるけれども、ちよつと考へさせられない譯にはいかなかつた。山での不幸なゲファールンに關しては、本書の横さんの序文中に引用してある松方

さんの文章が、山に登る者の心をよく代辯してゐる。

「小屋・焚火・夢」。いろんな感想を、スケッチ風な素描的な短い詩章に盛つたもの。ベルグシュタイガーのノートである。讀めば讀むほど味が出る。私自身時々何か新しく思ひついたり、又は疑問の答を考へついたりするが、それらは大抵こんなところで既に大島君のいつてゐることに後から氣付くことが多い。よくもいろんなことを考へたものと、呆される程だ。

「山への想片」は、「登山思想の時代的變遷」を精しく考察したものであるが、同時に大島君自身の登山思想の推移を暗示してゐる。これは勿論考察としても甚だ優れたものであるが、大島君がこの考察を試みるに至つた直接の動機は、登山思想の變遷そのものに對する興味よりは、むしろ大島君自身の山登りに於ける一つの問題——それは大島君にとつて甚だ重大な——に對する解答を得ようとしたことにあると思ふ。即ち、その山登りに於て一つの重要なポイントになつた時に、必然的にかかる考察を試みる必要に迫

られた結果であると、私は信じてゐる。そして大島君は、その結果甚だ立派な解答を得た。だから、その解答に依て即ちそのポイントを新しい出發點として、そこから新しい登山生活（少くとも一つの新しい信條と心境とをもつたところの）が始められた、と私は考へてゐる。「荒船と神津牧場」は、即ちその新しい生活に於ける收穫の一例であると私は思ふ。

それから「峠」の前半も、やはり山登りの“Moral side”に就ての興味深き一考察である。これでは主として旅又はさまよひ歩きのメタフィジクスが取扱はれてゐる。

「穂高岳スキー登山」。この一つの登山記のみでも、大島君が我國のスキー登山界に於て如何なる地位を占めてゐたかが明かである。それは我國のスキー登山史上に永久に記憶さるべき記録である。それからまた文の構成からいつても登山記録として模範的なものである。各學校の山岳部の部報などは、なまじつかな考察的のものを載せるよりも、かういつた風のもので充實される方が遙かに望ましいことである。

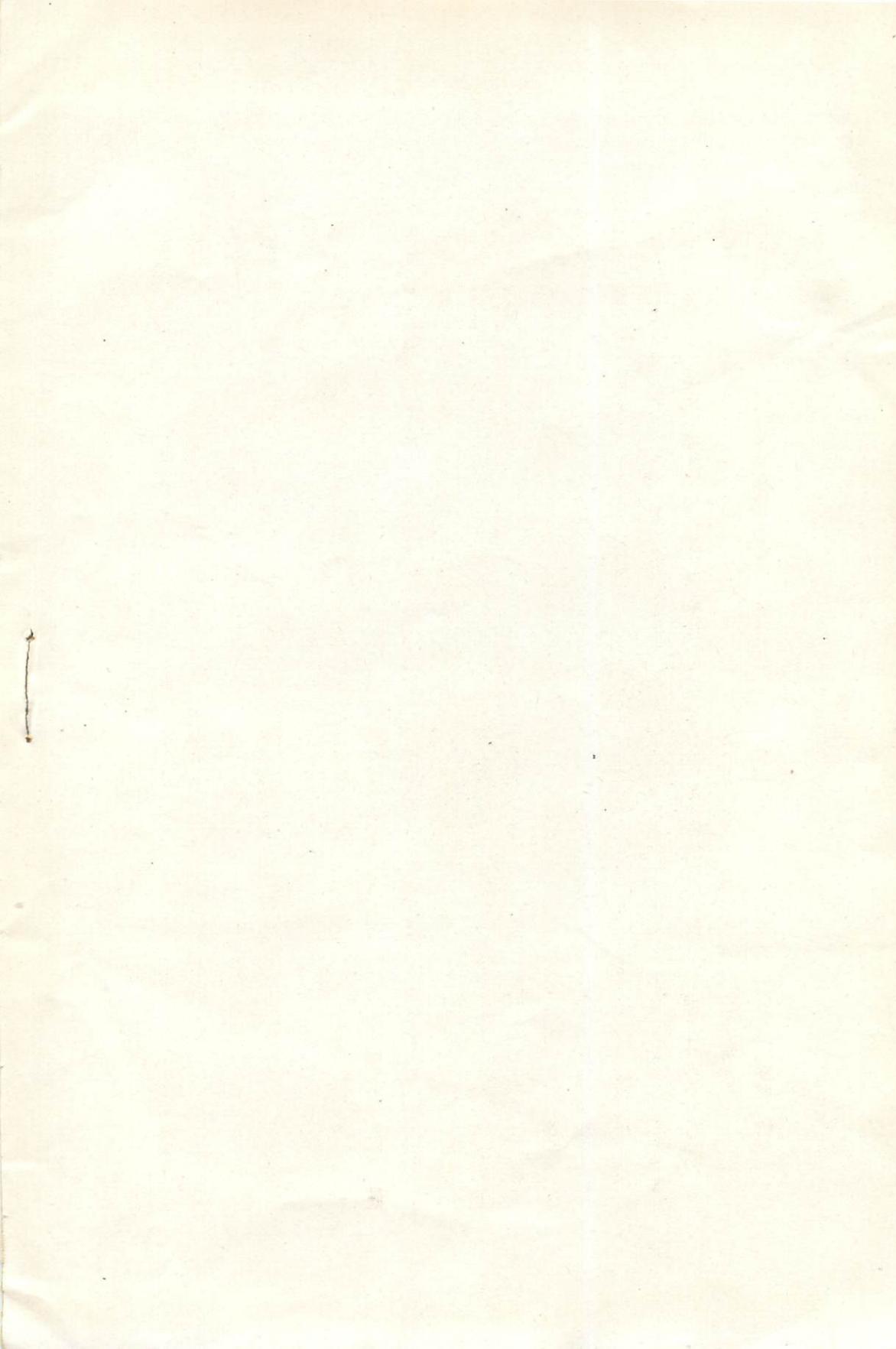
「峠」と「荒船と神津牧場」については、あつちこつちで斷片的に觸れてゐるし、大体それで言ひ盡してゐると思ふからここには略す。唯「峠」の、殊にその後半は「山とスキー」に發表後大島君自らかなり朱筆を加へたものであるそれは、いつか本書の編輯者の豊邊さんに原稿を見せてもらつたんだから確だ。實際に「山とスキー」と較べてみればそれは解る。それから「山への想片」「峠」等の載つたのは丁度私の「山とスキー」の編輯にたづさはつてゐた頃で、校正は主に私がやつたんだが、後からみると赤面する程誤植が多かつた。永く苦痛の種となつてゐたが、それらも本書ですつかり訂正されてゐる。

「頂・谷・書齋」。その前半にみる鋭い感覺と非凡な表現。ここに於て大島君の優れた詩人としての面目は躍如としてゐる。尤も、かういふ表現様式は大島の發明ではなく、我國の名のある二三の詩人達に依つて既に試みられてゐるのであるが、とにかくこの感覺は素晴らしい。私自身も詩を書いたことがあるので、（勿論聡しい程未熟なものばかりだが）少しは解ると思ふから、ちよつと大島君の詩のこと



・空沼嶽附近・

神谷俊雄



に觸れた譯だ。それとは無關係な話だが、多分これの模倣と思はれるものを一二の山岳雜誌などで見かけたことがあつたが、てんでなつてないものばかりであつた。

それから、この後半では、「書齋」の山登りのことが幾つか書かれてゐる。主に山登りの上に於て信條といふやうなものだ。單獨登山にもちよつと觸れてゐる。短いがしかし明確な卒直な言葉だ。

「荒船と神津牧場附近」。これももうこの文章の方々に書いてしまつたから、省略する。とにかくこれは、大島君の筆も心も共に圓熟した時の作品である。

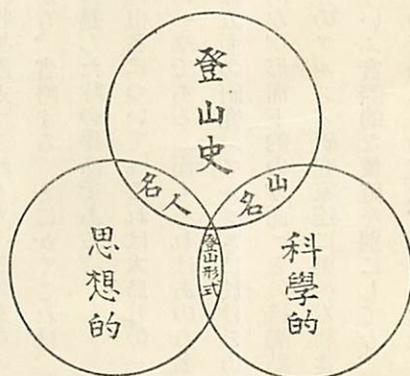
「アルプスの山名について」。これは大島君の「アルプス研究」の表れ的一端である。而もそれはあの有名な登山史研究と科學的な方面の研究（アルプスに於ける山登りの有形的な、物質的な、形而下のの方面）との接觸點を示すもので、この研究のアルプス研究家達に與へる利益もさることながら、さういふ實際的な價値を別にしても、私達アルプスに關心をもつものにとつては、この一文はとてもうれしいものだつた。アルプスは唯地圖の上と寫眞と書いたもの

でしか知らない私なんかにも實に面白かつた。それも、實際にアルプスをうんと登つて來た人達が書いたのならそれ程驚きもしないのだが、一度も行つたことのない大島君が書いたんだから、私には尙更興味が深いのだ。たしかに大島君の頭の中には、自身で親しく歩いて來たところのやうに、アルプスの一つの谷、一つの峰もはつきりと描かれてあつたんだらうと、私はこの一文を讀んで直ぐ感じた。若しかしたら、うかつに歩いて來た人達よりも、氷河や岩壁の小さな部分についてさへ、ずつと精しく知つてゐたかもしれない。

元來大島君のアルプス研究は三つの方面からされてゐた（事實はもつと多方面に涉つてゐたかもしれないが、私に考へられるのはこの三方面である）即ちさつき言つた科學的方面と、登山史と、もう一つ思想的方面、言葉をかへれば山登りの“*Tonal state*”に關する研究、例へば、「山への想片」や「峠」などがそれである。勿論これらの三方面は何れも別々にアルプス研究の對稱となり得るものであるがまた互に密接な關聯もある。これを圖解すれば次の如くで（この圖表はちよつと無理があるが）「雪崩の研究」など

は科學的の部分の重要なものである。

究 研 ス プ ル ア



×

以上で「山」に關するこの覺書は終るが、未發表の遺稿が早く發表されることを切望する。そして本書の出版に際して多大の盡力を惜まなかつた編輯者達、殊に最も煩雜な校正の仕事に終始當られた豊邊さんの勞を多とする。

尙一言私自身の希望を付け加へ ならば、登高行第五年に載つた「單獨登山について一言」も蒐録してほしかつた尤も、どれもこれも入れたいものばかりでありながら、紙

數には制限があるから、あの一編も止むを得ず割愛されたことであらうし、収録した作品の選擇についても異論はないが、あの一文は如何にもよく大島君の氣質や信條を現してゐるから、入れた方がいいやうな氣がする。尤も單獨登山については、「頂・谷・書齋」にも書いてあつて、澤山だと言へば言へないこともないし、私自身は今日では（今後どう變るか解らないが）大島君とは少し違つた考をもつてゐるけれども、（大島君よ、生意氣をいふ後輩を赦して下さい。勿論僕の考は甚だ未熟には相違ないけれども、とにかく眞面目に山登のメタフィジックスも考へて來たその眞實性だけを認めて下さい。そして今後と雖も私は、私の考を卒直に大膽に發表して、先輩達の教を乞はうと思つてゐます。そのことが少しでも私自らの生長に役立つに於ては、假令それが如何に愚かなものであつても、例へばそれが嘗ての如く年下の人からの冷笑にさへ値する程のものであつても！）あの一文は色々の意味で優れてゐると私は信じてゐる。

（一九三〇、五、三〇）

「著作表」補遺

本書の巻末には著者の全著作を網羅した精細な著作表が掲げてあつて甚だ便利だが、その中に、「山とスキー」に掲載されたもので二三洩れてゐるものがあるからこの機会に補つておく。この脱洩の責任の一半は私にあるが、編輯者の豊邊君にも責はある。「山」が岩波から出ることに決つたのは昨年のもので、「山とスキー」に掲載された大島君の著作を調べる依頼を豊邊君からうけたのはたしか八月であつたと思ふ。譯詩譯章などに譯名の無いものがあるからである。私が編輯をやつてゐた第四年頃のものゝ直ぐ明かになつたが、それ以外に二三大島君のものかどうか不明のものがあつたので、毎年替つた編輯者達にそれぞれ問合せを出したのだが、遠方にある人などあつて返事が少し遅れて來た。それでその不明の二三のものを除いた著作表を早速豊邊君に送つておいた。その九月横濱で豊邊君に會つた時にも、大島君の全著作に對しては九牛の一毛にも等しい二三の短い譯詩であるから、若し解らなくても差支ない

といふことだつたし、私はまた「山」にああした精しい著作表が載ることは知らなかつたので、後で總て返事が來て明かになつたのを、つい豊邊君に知らせることを怠つてゐた。いよ／＼「山」が上梓されて、初めて手にした時に、巻末に著作表が入れてあるのを見て、私はこの手ぬかりを少なからず遺憾に思つた。私もその儘にしておいたのは悪かつたが、豊邊君ももう一度私に催促しなかつた罪もあるそれで私はこの機会にそれに洩れてゐるものを補つておくこれで少くとも「山とスキー」に載つたものは總てであると私は信ずる。

著作表補遺 (「山とスキー」掲載の分)

- 一、アルヒズムス (譯章) 第二十八號 (二・二・八) 一五頁
- 二、譯章 第三十一號 (二・二・一) 一頁
- 三、滑走 (譯詩) 第六〇號 (二・五・五) 一頁
- 四、さまよひ歩いて (譯詩) 第八十六號 (三・二・〇) 七頁
- 五、灰色の恐怖 (譯章) 第八十六號 (三・二・〇) 一三頁
- 六、老登山者の回想 (譯章) 第八十六號 (三・二・〇) 一四頁

以上

廢刊と解散の言葉

殘務整理委員 廣 田 戸 七 郎

「山とスキー」

登山家にして、將、スキー家にして、現今では此名を御存じのない方が恐らくない程に此名は、廣く世間の方に知られました。その雜誌とそしてその會とに今私は此處に離

別の言葉を贈らなければならぬ立場に置かれました。それは私が此會とそして雜誌の創立時代から關係させて頂き今日まで直接、間接厄介になつて、その成長を最も精しく知つて、而も札幌に居残つて居る最故參として筆をとるの光榮の役に當つた譯であります。

私の拙文は恐らく「會とそして雜誌と、その取り巻き」とに就て態を爲さないものに終つて仕舞ふかも知れません。

廢刊に關しての一切の経緯については述べたくありません。たゞ生れ出てから今日に到るまでの懐古と、今、會の解散と共に雜誌の刊行を廢めるに到つた單簡な理由を述べさせて頂きます。

會の誕生とその成長

山とスキーの會の誕生は、誠に無事であつた。生れたのは大正十年の四月である。當時本會を生む爲に良き親であり、兄弟である人達が出揃つて居た。曰く、中野誠一君、加納一郎君、故板倉勝宣君、松川五郎君、板橋敬一君等である。

これ等の人達は、當時の北大スキー部の重鎮であつた。

尙重鎮を指導したり、補けたりして會の爲に盡力されて居た人遂に木原均、福地義二郎、六鹿一彦、後藤一雄、平井左門さん達の居られたことも附け加へねばならない。

大切な生れ兒の名づけ親は現京大農學部教授並河功先生である。

立派な名づけ親と良き育ての親を持つて幸福に此世に生れた山とスキーの會は、唯一の事業月刊雜誌「山とスキー」を發行して行くことになつた。

創刊號は大正十年五月から出ることになつた。

當時は此方面にかけて特殊の趣味と、鑑識と批評眼を持たれた加納君が、先づ編輯主任の形で、他の人達は凡べて犬馬の勞をいとわずに大いに助力つとめたのであつた。そして會は否雜誌は數年を出でずして、誠に他のかうしたアマチュアー雜誌や（營利雜誌などは問題にならないが）同人雜誌などの追求出來得ない特徴とそして常に獨創味を持つて居て、次第に世の中に認めらるゝ様になつた。そして年を経ること足掛け九年、號を繰ること一〇〇號に到つて今日此處に凡べてを放棄して、凡べての環境と誠に綺麗にお別れすることになつた。

此九年の成長の間、スキーと山岳については、常に向上へ進歩開發へと行路をたどつて、斯うしたいあゝしたいと考へたことは、幾つとなく此會は、雜誌を中心にして爲し遂けて來た。従つて斯界に投げた業績は決して手前味噌ではないが、大なるものがある。

初めの内は北大スキー部仲間の研究機關第一の目的であつたが、次第に對外的に會の立場がなつて來て、中頃から、もうスキー部内の要求よりもむしろ外部の方からの要求の爲に、なか／＼に此會と雜誌の刊行は止められなくなつて、正直の處此處三、四年來は情勢で、兎に角今日まで押して來たのである。

今止めると聞いて誰しもよくも三號雜誌で終らなかつたと驚嘆するに違ひない。

會の爲して來た事業の跡は今更紙數ふざけに此處で述べあけるまでもないことである。私が今書かなくなつて、少くも本邦スキー界の史上に立派に偉大なる業績は輝々として、永久に残つて行くであらうから。否皆さんが認めて下さることであるから。

總じて本會は甚だしい浮沈の跡もなく、大きな傷も負は

す、常に健實に歩みつゝ此處まで進んで來たと云ふことが出来る。

此處で私は本會の會員と、多大なる御援助を賜つた多くの方々に一言解散せねばならなくなつた現狀を簡單に申し上げたいと思ふ。

會員諸君に

山とスキーの會には、創立以來今日に到るまでは五十有餘名の會員がある。皆會を守つて行くことに忠實な人達である。だから一株乃至二株の出資金を負擔することを承認して會員列に入つてくれた。

會員諸君の内には、嫌々乍ら入會させられた人も少くないかも知れないが、それでも會の爲となれば皆文句なしに尊い時間をさいて集合もし、會談もし、奔走もし、興行もしてくれたのである。尊い時間と、勤勞とを惜しみなく願つてくれた會員諸君に、今會が兄等の責任を果してくれないから困る。責任だけ負ふてくれと申込んでスツタ、モンダと問題を起すことは、餘りにも執拗なことで到底爲し得ない。

在札會員中自分は會の最故參として、今解散の結果を熟考せねばならない、誠に苦しい立場に置かれた。自分は會の整理委員の一人として此誌上より會員諸君に一言お頼みしたい。それは、凡べての事情から見ても今度會が解散する潮時である、と考へて私達に在札の小數會員の會合ではあつたが、會を立派に解散の形として、木田君、小川君、武野君、中村君、井出君、久々津君、長野君と僕の八名が會の整理をすることになつたから、どうぞその點を御了解して頂きたい。

解散會合は六月廿五日であつた。その日は甚だ小人數の集りではあつたが、大野先生初め、現在の北大スキー部の中心學生諸君と在札の北大スキー先輩が、大部分寄つて決定したのであるから、旁々先輩加納君の御意見、木原さんの御教示に善處してセン、ベイと番茶を飲んで大學の學生集會所の五號室で淋しい集會をして解散と決めた。さういう譯であるから此點は亦御含みを願ひたい。

整理の事はなか／＼一朝にして終りをつけ難いと思ふが、恐らく諸君に分配する程の剩費はなからうから、既納の出資金は寄附と思つて頂きたい。

會は諸君の大きな力によつて數々の業績を斯界に残して會の聲名は全國を風靡して居る、丁度得意時代を若年九才にして立てて來たことを思ふと、今此處での解散は會には最も良い潮時である。

會も御存じの様に創立の當時とその三、四年間はたしかに獨創的な雑誌を續けて出して居た、それは當時の人達の豊富な趣味性と、研究的態度から生れたものであつて、従つてその反響する處は、獨り北大スキー部のみに止つては居らなかつた。そして對外的に我が山とスキーの會とそして雑誌は權威を認められ、多數の人達から愛撫されて來たのである。

會として雑誌の發行は、學生自身中心となつてやつて行く都合上、年度變りには必ず總會を開いて適當な候補者を見出し、先輩の残した此大業を續けて、兎も角第九年の歩みをして來たのである。

然し此二、三年はたしかに情勢的に持續して居たものと云つて間違ひはない。それは對内的の必要と云ふよりも對外的に我が山とスキーの會は解散する譯に行かず亦唯一の機關誌「山とスキー」を廢刊することが出来なかつたので

ある。

然し會の仕事の中心をなす北大スキー部の現状は、到底學生自身に此繁務をとる時間と餘裕を與へなくなつたのである。

無論大きい解散の理由には何處でもつきものゝ一つの理由、財政的問題がある。然し此方は今直ぐ詳しくお知らせは出来ないが、何れ整理の上、お知らせする。

こんな理由で解散と決定した譯である。それが今日の山とスキーの會の諸状態から綜合して花々しい出方であると思ふ。そして同時に今止めて終つた方が北大スキー部の偉業に對しても亦名聲に對しても傷つかないことにならうし亦可成り數多い北大スキー部の偉い諸先輩に對して御迷惑をかけないで済むと思ふのである。

云ふまでもないが山とスキーの會はじくなつても、北大スキー部應援は何卒今後も不相變頼みたいとは、北大スキー部員諸君の切なる懇望である。此言葉を一言附け加へて會員諸君に解散の報告をしたいと思ふ。

會の爲に御後援下された方々に

我が山とスキーの會に對して機關誌「山とスキー」を通

じて皆さんから非常な熱とそして愛情に満ちた御後援をし
て頂きました。

その御後援は有形、無形に今日の會と會の發展を支持し
て下さいました。一々の業績は雜誌上に詳記せられて居る
處であります。

その皆さんの御後援の前に今日私達の會の解散をお知ら
せねばならぬことは誠に遺憾千萬なことではあります
憶へば九年といふ長い間、皆様の御後援によつて激勵され
成長して來た私達の會は、十二分に目的を達したのであり
ます。正に花々しく散るべき時にあるのであります。私達
は過日會員の總會を開き別記八名の整理委員をあげて、殘
務整理に當ることになりました。皆様に御迷惑のない様に
會の結末をつける積りで居ります。比處に解散に當りまし
て本誌の爲に特に御後援下さいました左の方々に感謝の言
葉を捧げたいと思ひます。

青田周川 青木 勝 足羽正伸 麻生武治
別所安次郎 舟田三郎 藤瀬新一郎 古山甲二
藤田勝止 細川護立 葉谷忠三郎 星 數三郎
東 孝太郎 比企 元 原 忠平 春田まさき

平間 尙	伊集院虎一	稻田昌植	石塚照雄
今泉剛一	伊藤虎夫	板橋 卓	石内直太郎
郡場 寛	近衛直磨	興村禎吉	木原 均
慶應山岳部	小竹 實	柏木民次郎	小池文雄
河野廣道	小森太郎	黒住久彌	近 澤
六鹿一彦	目黒四郎	松方三郎	横 有恒
森田 昇	松澤幸三郎	故夏間純良	額田 敏
成瀬岩雄	西村眞琴	成田秀三	大橋直之助
岡部長量	小川 泰	岡田喜一	岡田 實
奥井由雄	岡田次郎	小田俊郎	大戸健一
讚岐梅二	仙波正雄	坂村 徹	澤田武太郎
佐藤久一郎	須藤 勇	酒井嘉七	杉山又雄
齋藤省三	坂本直行	齋藤文彦	志賀 亮
坂東彌直	島田昌一	坂本丁次	竹内 亮
館脇 操	朽内吉彦	寺島修吉	高橋次郎
竹内強一郎	高橋 昂	武田久吉	照井陸奥武
上原長十郎	内山數雄	宇都宮 高	渡邊千尙
山口秀次郎	柳 壯一	山縣 浩	故山口壽一
山崎春雄	吉田世紀	山田勝巳	八代雄三

故人板倉勝宣君、大島亮吉君、岡村源太郎君、藤江永次君の靈前に、特に本會は此處に解散に當り本會と密接な關係を持たれ、筆舌に盡し得ない大きな御力となつて下され且つ永遠に遺るべき山岳或はスキーに關する大論文を賜つた四人の方々の本誌掲載の分の業績を此處にかゝけ、謹んで靈前に答へたいと存じます。

故板倉勝宣君

一、登山法に就ての希望	年目	頁	號數
二、春の槍から歸つて			3 4
三、雪の信飛連山とスキー			1 10 1
四、槍の肩より穂高を望む(寫眞)			1
五、黒岳より凌雲岳を望む(〃)			1
六、北海道の冬期登山の道			1

故大島亮吉君

一、冬季登山とスキー登山との定義	一	二三	13
二、シイロイフア―は如何に地圖を見るべきか	二	一	
三、スキー地圖の作製に就いて	二	五	16
四、火口原のスキーヒユツテ	二	八	18
五、五月の立山	二	一〇	19
六、〃	二	一四	21
七、〃	二	一七	22
八、〃	二	一八	23

九、日	没(譯詩)	二	七
〇、冬	森(〃)	二	七
一、晩	秋(〃)	二	七
二、山	人(〃)	三	七
三、シユブルングシヤンツエにて(〃)		二	二
四、私が板倉君から享けたものは		二	二
五、我國に於ける岩登りの前途にまで與ふ		三	二
六、スキー地圖作製に就いての補遺		三	二
七、ベルグシユタイガーの手帳より		三	二
八、山への想片		四	三
九、再び冬季登山とスキー登山の定義に就て		四	三
〇、平原の上に響ゆる山		四	三
一、ベルグシユタイガーの日記より		四	三
二、記念として		四	三
三、譯	章	四	三
四、〃	章	四	三
五、拔	章	四	三
六、譯	章	四	三
七、道と道伴れ(譯)		四	三
八、峠		四	三
九、雪崩と地形圖		五	三
〇、エミールジャヴエルに(譯)		五	三
一、登山史上の人々		六	三
二、〃		六	三
三、登山史上の黄金時代		六	三
四、登山史上の人々		六	三
五、〃		六	三
六、〃		六	三
七、〃		六	三
八、〃		六	三
九、冬	雪崩	六	三

雑 録

◆「山とスキー」のバックナンバー

唯今左の號數の殘本を所持して居ります。御希望の方には喜んで御頒ちします。

- 第一年目(二號 一五號) 五號から九號と一二號から一五號
まで
 第二年目(一六號—二六號) 一八號から二六號まで
 第三年目(二七號—三七號) 三五號、三七號
 第四年目(三八號—四九號) 三九號から四九號まで
 第五年目(五〇號—六〇號) 五一號と五三號から五五號まで
 第六年目(六一號—七二號) 六一號から六四號までと、六七
號から七一號まで
 第七年目(七三號—八三號) 七三號から八二號まで
 第八年目(八四號—九四號) 八四號から九四號まで
 第九年目(九五號—一〇〇號) 九五號より一〇〇號まで

◆スキージャムピング

本春本會から發行して各方面から非常な歓迎を受けた廣田戸七郎氏著「スキージャムピング」の殘部が本會にあり

すから御希望の方は「山と雪の會」宛に申込んで下さい。

◆寄贈並新着圖書

- 板倉勝宜遺稿「山と雪の日記」 東京 梓 書房
 窪田・田部兩君追悼記念「銀嶺に輝く」 東京帝國大學運動會
 スキー部 山岳部
 スキー部ハイムニス 神戸スキー俱樂部
 ヌ タ ツ ク (二號) 札幌第二中學山岳旅行部
 山 水 巡 禮 (六九號—七〇號) リュックサック俱樂部
 ペデスツリアン 神戸 徒 歩 會
 アスレチックス 大日本體育協會
 Alai-Pamir Expedition 1928
 Ski Notes and Queries No.41 The Ski Club of Great Britain
 Year Book(1929) United States Eastern Amateur Ski Association
 Vinterrettsken 木 原 博 士

◆寫眞の説明

ビルゲルロードの寫眞は、麻生武治氏から廣田氏に贈られたもので「ルード兄弟のジャムプはほんとに鳥が飛ぶ様です」と註がしてあり、

フィンニアレンゲンの方は木原博士より本會へ「トロンデイエムに開催された諾威スキー大會」の記事と共に寄贈し

て頂いたものです、何れもホルメンコロン大會に於けるジヤムブの寫眞です。

「空沼岳附近」は神谷俊雄氏から本會へ寄贈を受けたもので、尙此の外に「漁岳」の寫眞を頂きましたが紙面の都合で掲載出来ませんでした。

編輯後記

雜誌の發行が遅れてお待たせしたことを衷心から恐縮致します然も色々の事情のもとに廢刊するの止むなきに至つたことは何共申譯ありません。廢刊のことにつきましては、別記廣田氏の「廢刊の言葉」にもある通り、今、恰廢した方が本會としては、一時なのです。皆さんの御期待に反いて遺憾ではあります、御寛容を願ひたいのであります。

殘務は、今度新に組織した左記個所に於て、總會で決定した、本田、廣田、武野、中村、久々津、井出、小川、長野の八名の整理委員ですることになつて居ります。

札幌市北二條西十三丁目一番地

山と雪の會

振替口座小樽八四九五

雜誌「山とスキー」の講讀料として御拂込みになつた殘金は整理委員から報告と同時に御送金致すことになつて居ますから御合み置き下さい。

本號に掲載すべく頂戴した高橋昂さんの

「北海道に於ける三大會のデスタンスレースの記録について」

と題する原稿は非常に有益な記事であります、都合により掲載出来ませんでしたことを遺憾に思ひます。

右の外、空沼小屋の開放に就きその使用規程や手續、並に大倉男爵の御骨折て出来ることになつてゐる大シャンツエのこと、先般來道の山岳スキー家シュナイダー氏のこと、など記すべきことはたくさんありますが、之は近く何等かの形式でお知らせ致す心算です。

特に木原先生には滞歐中、有益な記事や寫眞、雜誌など度々送つて下さいまして有難う御座いました。深く感謝致します。

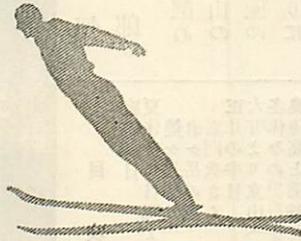
第九年目の總目錄は郵便を以て御送りします。

終りに長年、本誌を御愛撫下さいました皆さんの御温情に對して深く感謝致しますと同時に、皆様の御健康と、幸福に御適しなることを祈つて止みません。

著 郎 七 戸 田 廣

グンピムヤジーキス

行刊會の一キスと山



四六判
別刷寫眞版三十二頁
挿入圖版四十餘圖
定價 金壹圓五拾錢

本著はスキー競技に於て最も重要なスキージヤムブの一切を解説したものです。

御希望の方は
振替口座小樽八四九五番
札幌市北三條西三丁目番地
「山と雲の會」宛へ御申込
と同時に御振込下さい。

板倉勝宣遺稿 (最新刊)

山と雪の日記

序 追憶 横 有恒 松方 三郎

山岳人板倉勝宣氏が、雪煙に包まれて、白神の苑に復醒めぬ眠に落ちてから八年の時は既に流れた。しどまなる立山の雪は消える事があつても遺された者の深き悼みは終に癒ゆる事はないであらう。誠に氏の懐は何物にも替へ難い餘りに大きな損失であつた。

本書に收むる所、氏が山に親しむ者に遺した績の片鱗に過ぎないとは云へ、氏を懐しみ、其の足跡を視ふ窓は本書を措いては他にないのである。即ち敢へて岳友諸兄に捧げる所以である。

氷と雪

藤木 九三 跋
加納 一郎 著

四六判挿畫四一
コロタイプ十二
用紙上質特製

(目次進呈)

定價二圓五十錢
送料十八錢

目次

- 旅の一日 日記より
- 夏休みの日記より
- 焼ヶ岳
- 檜ヶ岳の嵐
- 嘉門次さん
- 正月の半日
- 大町より立山への一節
- 冬休みの登山より
- 奥徳高と乗鞍
- 奥徳高より南穂高へ
- 乗鞍登山日記
- 五色温泉スキー日記
- 山と雪の日記
- 夏の日記
- 大正地
- 上高地の月
- 霞澤ヶ岳
- 霞澤ヶ岳の途中
- 小屋の生活
- 冬の日記
- 峠停車場
- ステムボーゲン
- 直滑降
- テレマーカー
- 停車場より温泉へ
- 五色温泉より高湯へ
- 春の上河内へ
- 春の山に寝るの記
- 手稲山に寝るの記
- ムイネンリ岳登山記録
- 春の山から歸つて
- 登山法に就ての希望
- 雪の信飛連山とスキー
- 園谷
- 北海道の冬期登山の道
- 槍の北鎌尾根

四六判コロタイプ六葉
定價二圓
送料八錢
(初刷五百部)

電話 田神 二七五七番
振替 東京 七六八四番

書房

梓

東京 市賀 神町 田四

◆山とスキーの會は北海道帝國大學文武會スキー部の有志が、此の雜誌を發行する爲に作つてゐる會です。

◆スキーを研究せられる人、登山に興味を持たれる方が一人でも多くお読み下さることを願ひいたします。

◆山岳及びスキーに關して何なりとも御寄稿下されんことを願ひます。又印畫の御惠送を切望致します。原稿紙は御申越次第お送り致します。

◆原稿は、。を一字とし、行を更めるときは一字下けること。

◆記事中の數量は全て、C・G・S系によられん事を望みます。

◆雜誌代金に就て一應下記の諸項を御承知下さい。

本會より發する電信略號を「ヤマ」として居ります。

◆前金切れの時の御知らせは最後の分の包装中に同封して御送りします。次の御送金あるまでは配本を見合せます。

定 價 金三拾錢

*前金御申込か、現金でなければお送りいたしません。

*御送金はなるべく振替にてお願致します。

*六册分前金拂込の方には送料を頂きません

*前金の切れた時の御知らせは最後の分の包装中に同封して御送りします。次の御送金

あるまで配本を見合せます。

*本誌は營利的の刊行物ではありません。紹介。縁故の有無にかゝらず雑誌の代價は

頂きます。

昭和五年八月四日印刷

昭和五年八月六日發行

(毎月一回一日發行)

編輯者 長 野 寛

印刷兼 發行 者 長 野 寛

北海道札幌市北一條西二丁目

印刷所 札幌印刷株式會社

北海道札幌市北二條西三十三丁目

發行所 山とスキーの會

振替水簿八四九五番

La Gazeto
de la
Monta kaj Skia Clubo

No. 99.-100. agosto 1930 Spporo. Jpanujo

昭和五年八月四日印刷
發行本



M I M A T S U
MAPLE TOUREN SKIS!

帝大山岳スキー部、早大早高山岳部
學習院山岳部、陸軍戸山學校、一高、三高
四高旅行部、法大山岳部等、等、等…御用

夏山登山用具各種

手打「スタイガイセン」6本8本10本爪
手打永斧「ツエルマツト號」30cm.
檢定濟「グレチャーザイル」

“META” 燃料及び各種コツヘルアパラート
塗臘用パラ・アパラタト (¥.150)

北米ウキレスロー・スケート會社總代理店
スイス、META 製造會社日本代理店

合名會社

美 満 津 商 店

東京・本郷・赤門前

山とスキー

第九九・一〇〇號

定價金三十錢